

3 シンポジウム

テーマ「コロナ禍における生徒指導の方向性と課題」

指定討論者 桶谷 守

シンポジスト 水野 博之

榎並 俊之

木田 哲生

芳野 和宏

ファシリテーター 池田 忠

桶谷先生から

コロナ禍の学校生活に目を向けると、長期欠席に始まり行事の中止、時間割の変更で変則的な生活、先生方は子どもたちに三密の回避の徹底を行う。子どもたちの中には急速な変化に対応できず、問題行動を起こしたり、いじめの対象や加害者になったりしている。感染者の詮索から差別や偏見の問題が全国で起こっている。

文部科学省も新型コロナに対応した学校再開マニュアルの中で自殺、不登校児童虐待、差別や偏見に対して特段の注意喚起を促している。

このようなコロナ禍の中で、子どもたちが人と人とのソーシャルディスタンスを保つことと同時に、心理的距離と物理的距離をどう保つのが生徒指導上の課題となってきた。そこで、

◎ コロナ禍の生徒指導状況、新たに見えてきた課題とは！？

○京都市→小学校・・・問題行動4～12月 昨年度より約12%減少。

しかし6月中旬以降は増加傾向。

低学年を中心に登校渋り。（保護者の意向もある）

学校休校中SNS、通信ゲームなどのトラブル。

近隣住民への迷惑行為。

リストカット（5、6年生増加）、希死念慮。

中学校・・・問題行動4～12月 昨年度より約26%減少。

小学校より大幅な減少。

喫煙、バイクなど無免許運転などの触法行為。

近隣住民への迷惑行為。

9～10月、中学1年生の問題行動が顕在化

→小中ともに言えることとして

6月、少人数での学校再開による、不登校児童生徒の登校が増加した。

登校のエネルギーの高まり、少人数での学級活動が精神的不安を少なくした。

年度当初の学級づくり、仲間作り、学年集会、児童会生徒会活動などを通して先輩の姿を見て、自己有用感を養う時期がなくなった。

先生方はオンラインを使った絆づくりを進めてきた。

コロナ禍のピンチをチャンスに変えてきた。一人一台端末のデメリットもあるのでルール作り課題。

- 兵庫県→いじめ減少傾向，不登校増加傾向。（特に小学校）
中1の荒れ，卒業式，入学式などの行事ができなかった子どもたちのストレス，ネット環境なども低年齢化している。
- 堺市→いじめ問題行動減少傾向，不登校増加傾向。
コロナ禍が原因の不登校事案が増加。目に見えない不安ストレス増加。ICT活用の仕方が絆づくりにつながる。
- 大阪府→臨時休業中の子どもたちの実態把握が難しかった。
虐待・・・6月から事案が増加。
性被害，加害・・・SCへの相談倍増。
問題行動増加・・・暴力，いじめ，不登校増加。
行事に依拠した人間関係作りの大切さ。

池田先生から

「人間関係づくり，集団づくり，絆づくり」についての方向性は？

- 大阪府→休校明けに人間関係づくりに力を入れた。
コロナ禍においての行事を中心とした人間関係づくりから日常生活の中での関係づくり
- 堺市→個と個との関係改善，個と集団との関係改善が大切。
- 兵庫県→新たな行事の在り方，工夫した行事のやり方を集約して紹介していきたい。
SNSの取り扱い説明する必要性（低年齢化）
- 京都市→学校行事を工夫し実施してきた。修学旅行は行き先を変えたりバスを使ったり，食事の仕方など工夫したりして三密を避けて全校

自由記述欄からの質問

「不登校児童の支援範囲を学校としてどこまでを可能として動いていくことがよいのか，複数の不登校児童がいる場合どのような体制をとるべきなのか。」

実施した。合唱や体育祭なども学年ごとの実施，保護者へのオンライン中継。学びを止めない工夫。

- 堺市→学校の中だけで解決は難しい，SSW，SC，SLの積極的活用。
医者と協力して眠育アプリ活用。
- 京都市→タブレット端末を活用して学習支援，教室と自宅をつなぐ。
タブレット，ICTの活用によって先生方の負担を減らせるようにしたい。

- 大阪府→登校できるまで支援をしていくことがベストだが、担任だけ、学校だけでなく様々な組織と連携して進めていく。支援の範囲を狭めるのではなく、組織を充実させる。
ICTを活用したオンラインカウンセリングなど考えたい。

桶谷先生まとめ

- 質問のあった項目は、学校の先生、特に担任がどのような役割を果たしていくのかということで負担が大きいので、学校の中で役割分担をしっかりとる。(担任の役割、学年団の役割、管理職の役割、プラスSC、SSWなどの役割など)その中で教員のやるべきことを明確化することが大切。

自殺、不登校増加、いじめ減少、自殺のキーワードは「孤立」であり、自殺予防のキーワードは「絆」である。日常の教育活動の中で何をどうやっていくのか考える。いじめの問題から個と個との関係改善まで視野にいれて取組を進める。

新たな行事の在り方、実践を集約して各学校に返していく。
低学年の情報リテラシーについての学習を進めていく。

- 月刊生徒指導1月号 新井先生の論文のまとめの文章を参考に、
- ・多様性にこだわり均質化のみに走らない学校づくりをめざす。
 - ・児童生徒の間に「対等な関係」を維持する。
 - ・自己信頼感・自己有用感をどう育てていくか。
 - ・緩やかな繋がりを求めていく。
 - ・適切な援助希求（弱音を吐いても大丈夫）を促す。 など

↓ 以上のことを踏まえて

- ・一人一人の価値を認め、原点に戻りながら、子どもたちがそのときその場で何が正しいか判断し行動する力が求められている。
- ・子どもたち一人一人の心を繋いでいくのが教育の役割である。
- ・援助、相談を求められる力である援助希求能力を子どもたちに身につけさせることが今の生徒指導に求められることである。
- ・コロナから身を守るという受け身の姿勢に留まらず、児童生徒、教職員、保護者が一緒になって知恵を出し合い「安全・安心な学校環境」を作り出していこうとする能動的な姿勢が、コロナ禍の中でのいじめ防止、自殺予防において求められる。